

報 告

作業療法学生が抱える不安について

Anxieties experienced by occupational therapy students

津田勇人*、岸上雅彦、上島 健、長辻永喜、佐竹 勝

要約:「作業療法士になりたい。」あるいは「とりあえず大学に入りたかった。」という理由から作業療法士の養成機関（専門学校・大学）へ入学はしたが、自分の選択した進路に不安を持つ学生は少なくない。教員は学生の有する様々な不安をもっと客観的に把握して解決への糸口を探る必要性に迫られている。しかし作業療法学生の抱える不安に焦点を絞った解決の糸口となる有効な資料はほとんど存在しないのが現状である。そこで我々は独自に作成したアンケート用紙を用いて、作業療法学生の有する不安に関する調査を継続的に実施してきた。本報告では、我々が作成したアンケートの紹介と専門学校作業療法学科学生に実施した横断的・縦断的調査の結果、および、平成18年度入学の大学作業療法学専攻学生に実施した結果から学生の抱える不安の実態を明らかにし、総括的な考察を行った。さらに、作業療法学生の不安を軽減するために、我々が実施してきた「OTガイダンス」についても紹介した。

Key words: OT, students, Anxiety

1. はじめに

理学療法士・作業療法士法が施行されて43年が経過した。平成18年3月現在、作業療法士は33,696人である¹⁾。養成校は160校186課程で、そのうちの21.9%が4年制大学での養成課程であり、年々その割合が増加している。当初の作業療法士の養成機関は、旧労働省管轄の九州リハビリテーション大学を除いて、すべて旧厚生省立の3年制専門学校であった。それに追従した私学もすべて旧厚生省の認可を受けた3年制の専門学校を設立した。1980年代に入って、国立大学に医療技術短期大学部が設立され、文部省管轄による作業療法士の養成も始まった。

現在、厚生省立の3年制専門学校は随時閉校され、医療技術短期大学部もすべて4年制の学部へと組織の改変を続けている。このような変遷から「国が考える作業療法士の養成形態は4年制の大学教育である²⁾」ことは明らかである。この国の方針に従う形で4年制の私立大学も増加し、中には医療とは全く無関係と思われる文系大学や文系学部でも作業療法士が養成されている。その一方で、専門学校も毎年新設されている。大学と同様に医療とは全く無関係な分野からも専門学校が設立され、なかには4年制の修業年限を有した高度専門士を養成する専門学校も少しずつ増加している。その結果、冒頭で述べたように作業療法士になるための間口は相当広いというのが、臨床畑・教育畑を問わず作業療法士全体の実感である。

受験生の立場から見ると、バブル経済崩壊後の長期に渡る不景気のために、一般大学卒業者の就職率が低迷するなか、景気に左右され

*Hayato Tsuda
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部 作業療法学専攻
E-mail: tsudah@kawasakigakuen.ac.jp

ない保健福祉医療分野を有する大学は、比較的魅力のある進路となっている。一口に保健福祉医療職と言っても、その内容は多岐にわたる。

落合ら³⁾は、医療系大学への進路決定プロセスには、「出会い型」、「早期決定型」、「途中変更型」、「直前決定型」、「回避型」があり、様々な志望経過を持つ学生がいることを指摘している。中学・高校生時代に脳卒中片麻痺のために入院した知人を見舞った時に作業療法士を知った「出会い型」や、早期から進路についての情報を集め意思を固めた「早期決定型」のように「作業療法士になりたい」、「作業療法士になって社会に貢献したい。」と情意に満ちた学生であればさほど問題はないが、途中で進路を変更した「途中変更型」、作業療法に関する予備知識もなく入試直前になって進路を決定した「直前決定型」や浪人だけは回避したい「回避型」学生の場合、作業療法に関する専門的知識を教育する以前の問題として、医療従事者としての適性について教授する時間が多く必要となってしまう。大学全入時代は、受験生にすれば厳しい受験戦争からの開放であるが、医療専門職を養成する大学教員の立場から考えると、決して望ましい状況とは言えない。

当河崎学園は、平成18年度より4年制の大学として、いままで3年制の医療技術専門学校で培ってきた作業療法養成課程を発展させた形で新たなスタートを切った。当学園の作業療法養成課程に入学した理由として、平成17年以前の専門学校作業療法学科の入学生には「本当は理学療法士になりたかったが、理学療法士養成校に合格できなかったから」とか「自分の学力では大学は無理だけど、人の役に立ちたいから」という、「直前変更型」の学生が含まれていた。平成18年に開学した大学作業療法専攻に入学した学生からは「とりあえず大学に入りたかったから」とか「就職が良さそうだから」という話を少なからず耳にし、「直前決定型」や「回

避型」の学生も含まれていた。「本当は理学療法士」を目指した学生の場合、入学後も自分の中で割り切れず勉強への動機付けが高まらない学生や、「自分の学力では大学は無理」という場合は入学当初から展開されるハードな授業に着いていけない学生を専門学校教員時代に経験してきた。これらの学生は作業療法士養成課程入学当初からかなりの不安を有することは容易に想像がつく。また「とりあえず大学に入った学生」や「就職が良さそうだから入学した学生」の場合、授業に対しては無断欠席が多くなり、解剖学・生理学という基礎医学科目を真剣に理解するための動機付けを維持することは困難となる。その結果、試験で満足な結果を得られないため、作業療法士になりたいという気持ちはますます薄れてしまう学生を経験してきた。学業不振の理由を「もともと作業療法士になりたかったわけでもないから」と弁明する学生にいたっては、作業療法養成課程に在学することそのものを自分自身で否定しているとしか考えられない。このような中途半端な状態も学生に不安を抱かせる一因になる。さらに「作業療法士になりたい」と思って入学はしたが、自分の選択した進路に不安を持つ学生は専門学校・大学を問わず毎年のように経験してきた。

教員としてこのような学生を経験するなかで、“教員は学生の有する様々な不安をもっと客観的に把握して解決への糸口を探る必要がある”という認識に至った。そこで我々は独自に作成したアンケートを実施し、作業療法学生が抱える不安を客観的に把握しようと努めてきた⁴⁾。本報告では、我々が作成したアンケートの紹介と平成15年度、17年度に入学した専門学校作業療法学生に実施した結果⁵⁾、および、平成18年度入学の大学作業療法専攻学生に実施した結果から学生の抱える不安の実態を明らかにし、総括的な考察を加えることを目的とした。さらに、作業療法学生が抱える不安を軽減する

ために、平成18年度新入生に対し、我々が実施してきた「OTガイダンス」についても紹介した。

2. 試作したアンケートについて

2.1 アンケート作成の目的

作業療法学科に入学した頃の学生は、新しい世界に対する不安と期待という心理的葛藤が存在しているが、第1学年の前期が終了する頃には学校環境にも慣れ、当初抱いていた不安が軽減するとともに期待が増大し、作業療法士になるという目標が定着すると予想される。しかし実際の教育現場では、上述したように第1学年の前期が終了しても「自分は作業療法士になれるのか？本当に作業療法士に向いているのか？」という不安を有する学生も多く、中には不安が経時的に深刻化するため面談や進路指導といった教育心理的介入が必要な場合もある。『このような学生の不安を軽減することも教育現場の重要な役割であるが、学生の不安を客観的に評価しきれないまま対応しているのが現状ではなかろうか。』という認識から、我々は作業療法学科学生が①どのような不安を抱えているのか、②その不安の原因は何に由来するのか、という2点を明らかにすることを目的に、アンケート調査用紙の作成に着手した。

2.2 試作したアンケートの項目

試作したアンケートの項目は、大学生生活不安尺度を作成した藤井⁶⁾の自由記述の方法を参考に、不安について自由記述をさせた後、共通項目に分類して得られた19項目である(表1)。回答は5件法とし、項目ごとに「非常に不安である」を5点、「不安である」を4点、「どちらともいえない」を3点、「安心である」を2点、「非常に安心である」を1点とした。合計点数が多いほど不安が高いことを示している。

2.3 アンケート調査の試行

2.3.1 対象と方法

対象は平成15年度に専門学校へ入学した作業療法学科1年生40名(平均年齢 20.2 ± 3.7 歳以下、平成15年度新入生)を対象に試作したアンケート調査を試行した。調査は第1学年前期の終了時点で一斉調査として実施した。分析には因子分析法(主因子法、バリマックス回転)を用い、不安の要因を抽出した。対象者に対して、アンケート調査研究の説明を行い、全員から同意を得た。

2.3.2 結果

有効解答は100%であった。19項目中いずれかの項目で「非常に不安である」または「不安である」と回答した者は全員であった。質問項目の因子分析の結果は、累積寄与率を60%以上としたところ、4つの因子を抽出した(累積寄与率66.4%)。4つの因子の解釈については、因子負荷量が0.6以上のものを考慮した。

第1因子として因子負荷量が0.6以上の項目は、「学校の成績のことを考えると憂鬱である。」、「筆記テストを受けていて、解らない問題に出会ったとき頭の中が真っ白になってしまう。」、「筆記テスト中、緊張して自分の力が発揮できない。」、「授業の内容を理解することが難しい。」、「成績のことが気になる。」、「先生に“教務室まで来るように”と呼ばれたら何を言われるか気になる。」、「履修科目の成績判定“優、良、可”が気になる。」、「テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配である。」の8項目であり、その内容を「学業に関する不安(以下、学業)」と解釈した(寄与率36.8)。

第2因子として因子負荷量が0.6以上の項目は、「授業で発表するとき、声が震えることがある。」、「友達と一緒に何かをしなければならぬとき、うまく協力できるか不安になる。」、

表1 試作したアンケート用紙

質問項目	非常に不安である	不安である	どちらともいえない	安心である	非常に安心である
1 万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります					
2 1ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配です					
3 親・兄弟・姉妹の生活がうまくいっているのか不安です					
4 親の仕事がうまくいっているのか不安です					
5 友達と一緒に何かをしなければならぬとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります					
6 学校の先生と話をするとき、とても緊張します					
7 授業で発表するとき、声が震えることがあります					
8 教員に話しかけられると、何か不安になります					
9 筆記テストを受けていて、解らない問題に出会ったとき頭の中が真っ白になってしまうことがあります					
10 成績のことが気になって仕方がありません					
11 学校の成績のことを考えると憂鬱です					
12 筆記テスト中、緊張して自分の力が発揮できません					
13 テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります					
14 履修科目の成績“優、良、可”の判定が気になって心配になることがあります					
15 先生に“教務室まで来るように”と呼ばれたら何を言われるかとても気になります					
16 授業の内容を理解することが難しく、不安になります					
17 入学した学科が自分にあっていないような気がして不安です					
18 本学を退学したいと思うことがあります					
19 今、専攻している学科は、自分には合っていないのではないかと不安になります					

「教員に話しかけられると何か不安になる。」、「学校の先生と話をするとき、とても緊張する。」の4項目であり、その内容を「対人関係に関する不安（以下、対人関係）」と解釈した（寄与率14.0）。

第3因子として因子負荷量が0.6以上の項目は、「親の仕事がうまくいっているのか不安である。」、「1ヶ月の生活費が足りるかどうか心配である。」、「万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になる。」、「親・兄弟・姉妹の生活がうまくいっているのか不安だ。」の4項目であり、その内容を「日常生活に関する不安（以下、日常生活）」と解釈した（寄与率8.4）。

第4因子として因子負荷量が0.6以上の項目は、「今、専攻している学科は、自分には合っていないのではないかと不安だ。」、「入学した学科が自分にあっていないような気がする。」、「本学を退学したいと思うことがある。」3項目であり、その内容を「選択した進路に関する不安（以下、選択した進路）」と解釈した（寄与率7.2）。

2.3.3 考察

一般的に不安を感じることは正常な反応である⁷⁾。新入生の場合、基礎専門領域の学習・生活環境の変化・新しい人間関係の構築などの外的ストレスが多く不安を増大させている。毛束⁸⁾は作業療法学科新入生にCMI (Cornell Medical Index) とSTAI (State-Trait Anxiety Inventory) を実施し、高い不安が修学の上でも障害になっている可能性を示唆している。

第1因子である「学業」については、成績に関する不安が非常に高く、さらにテストの内容よりも点数や受け方について不安を抱いていた。学生であるため進級について不安を抱くことは容易に想像できるが、1年生の前期から、初めて学ぶには難解な解剖学や生理学などの科

目も多いため、成績や点数に固執することも想像できる。学業に不安を抱く原因として「生活習慣として勉強する時間の作り方や勉強の仕方がわからず、さらに習慣化していないこと」や「講義の受け方や確認の仕方がわからないこと」が挙げられる。学業に関する不安を軽減するため、教員には理解しやすい授業の実施⁹⁾や学習資料の作成だけでなく、勉強の仕方や講義の受け方について、きめ細かな指導が求められている。

第2因子である「対人関係」については、教員との関係、授業での発表、ある課題における友人との協業に対し不安を抱いていた。人と接し、関係を作り、さらに信頼関係を重要視する医療従事者である作業療法士にとって、対人関係は職業人としての資質・適性にも関係する重要な因子である。若者の対人交流技能の低下はマスコミなどでも取り上げられ、敬語を使用すること、挨拶をすることから対人関係を作ることまでの経験の少なさ、経験により身につけられる技能が身につけられていないことが指摘されている。「対人関係」に関する不安を軽減するため、小グループでの発表やグループワークを取り入れ、対人交流技能の向上を図るとともに、学生に対する教員からの声かけやクラブ活動・学園祭といったインフォーマルな場面での交流も重要と考えられた。

第3の「日常生活」に関する因子について、生活費に関する内容が多く含まれている。その背景の一つには本校が私学であるための学費の高さも関係しているのかもしれない。本校では学業優秀者の表彰や自習室の整備・図書館機能の充実を図り、間接的ではあるが生活費の不安を軽減するための対策を講じている。

第4因子である「選択した進路」については、専門職としての作業療法に対する不安が大きい。原因として、入学前より作業療法をよく知らないまま進路を選択し入学する者が少なから

表2 選択不安要因の因子負荷量

(バリマックス回転後の因子分析結果)

質問項目	第1因子 学業	第2因子 対人関係	第3因子 日常生活	安第4因子 選択した進路
11 学校の成績のことを考えると憂鬱です	0.822	0.182	-0.028	0.190
9 筆記テストを受けていて、解らない問題に出会ったとき頭の中が真っ白になってしまうことがあります	0.800	0.035	0.213	-0.048
12 筆記テスト中、緊張して自分の力が発揮できません	0.744	0.202	0.286	-0.015
16 授業の内容を理解することが難しく、不安になります	0.741	0.214	-0.098	0.072
10 成績のことが気になって仕方がありません	0.725	0.321	0.036	0.179
15 先生に“教務室まで来るように”と呼ばれたら何を言われるかとても気になります	0.716	0.308	-0.061	0.125
14 履修科目の成績“優、良、可”の判定が気になって心配になることがあります	0.700	0.303	0.177	-0.094
13 テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります	0.676	0.068	0.241	-0.093
7 授業で発表するとき、声が震えることがあります	0.326	0.825	-0.090	0.031
5 友達と一緒に何かをしなければならぬとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります	0.149	0.752	0.239	-0.269
8 教員に話しかけられると、何か不安になります	0.324	0.719	0.117	0.385
6 学校の先生と話をするとき、とても緊張します	0.456	0.672	0.285	0.073
4 親の仕事がうまくいっているのか不安です	0.056	0.102	0.835	0.300
2 1ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配です	0.095	0.134	0.692	0.249
1 万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります	0.150	0.150	0.680	0.174
3 親・兄弟・姉妹の生活がうまくいっているのか不安です	0.064	-0.119	0.620	-0.195
19 今、専攻している学科は、自分には合っていないのではないかと不安になります	0.009	-0.023	0.086	0.917
17 入学した学科が自分にあっていないような気がして不安です	0.060	-0.011	0.163	0.911
18 本学を退学したいと思うことがあります	0.096	0.263	0.435	0.604
因子寄与	7.719	2.934	1.764	1.519
因子寄与率	36.757	50.730	59.131	66.365

ず存在することが考えられる。作田ら¹⁰⁾は作業療法学科新生について調査し、専門職を選択する過程における情報収集手段として「インターネット探索」が最も多く、次いで「受験ハンドブック」や「人からの話」が有意に多いことを報告している。現代社会はITの普及により「インターネット」を利用して探索すれば多くの情報を瞬時に得ることが可能となっている反面、情報リテラシーの不十分な学生が多く、入手した情報を十分に理解できていないため実際の現場のイメージを抱けないことや、異なるイメージを抱くことにつながる可能性も否定できない。その一方で、谷岡¹¹⁾は作業療法学科新生に調査を実施し、作業療法学生は作業療法士を目指そうとする何らかの体験を経て、作業療法士という職業に興味・関心を抱いて入学していると報告しており、学生間や学校間の差が存在することが示唆される。

さらに入学しても作業療法のイメージがつかないまま入学時と変わらず、漫然と学校生活を過ごしている学生も少なからず存在する。選択した進路に関する不安の原因は、作業療法がその業務範囲が多岐にわたるため、自分の将来像を具体的にイメージすることが困難なことも考えられる。谷岡¹¹⁾は、作業療法学科新生の場合、「あんな作業療法士になりたい」と憧れる模倣の対象との出会いは少ないことを報告している。試作したアンケート調査を実施した結果、作業療法のイメージを早い時期から持たせ、進路に対する不安の軽減を図りながら、解剖学や生理学という基礎医学科目が作業療法とどう関連しているのかを具体的に示すなど、「学業」に対する作業療法学生のモチベーションを高める工夫も同時に教員に求められていると考えられた。

3. 新生を対象とした同一アンケートによる横断調査の実施

3.1 横断的調査の目的

本調査の目的は、平成17年度に当河崎学園専門学校作業療法学科入学生（以下、平成17年度新生）に同じアンケート調査を実施し、新生の持つ不安が平成15年度新生と比較して、どのように変化しているのかという不安の実態を横断的に把握することである。

3.2 対象と方法

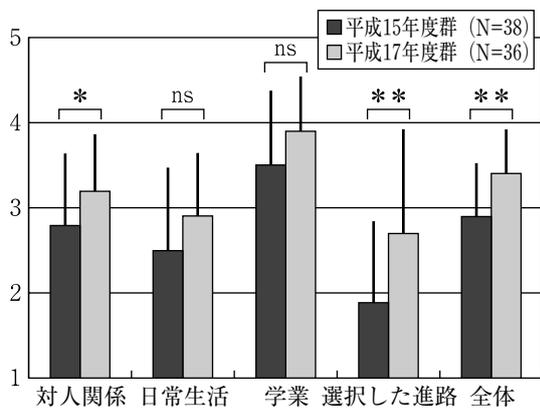
対象は、平成17年度新生36名（平均年齢 22.3 ± 6.6 歳 以下、平成17年度群）であった。アンケート用紙は我々が試作したアンケートに「対人関係」に関する2項目を追加した21項目版を使用した。調査は一斉調査として実施した。回答も前回と同様の5件法とし、点数が多いほど不安が高いことを示す不安点数を求めた。統計処理はMann - WhitneyのU検定を実施し（Dr.SPSS II for Windows11.01を使用）、有意水準を5%未満とした。前回実施した平成15年度新生38名（平均年齢 20.2 ± 3.7 歳 以下、平成15年度群）のアンケート結果（以下「前回」）も同様に点数化し比較検討した。対象者に対して、アンケート調査研究の説明を行い、全員から同意を得た。

3.3 結果

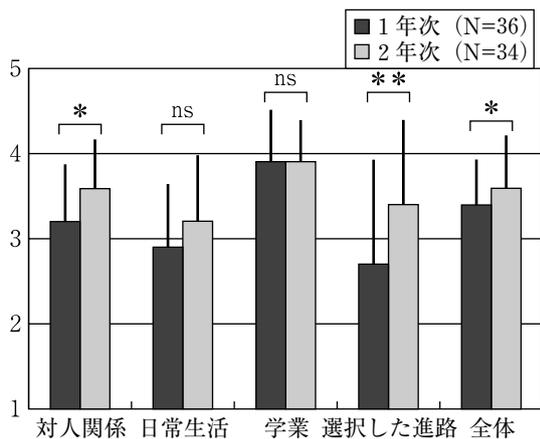
有効回答率は100%であった。図1-Iは21項目全体の各因子の合計点と4因子の合計点（以下、全体）を該当項目数で割り戻した結果を示している。グラフの縦軸の「5」は「非常に不安である。」、「4」は「不安である。」、「3」は「どちらともいえない。」、「2」は「安心である」、「1」は「非常に安心である」を意味し、「3」を基準に「5」に近づくほど「不安」が強くなり、反対に「1」に近づくほど「安心」の程度

が強くなることを示している。全体では平成15年度群が 2.9 ± 0.7 であったのに対して、平成17年度群は 3.4 ± 0.5 と有意に増加していた ($p < 0.01$)。「選択した進路」では平成15年度群

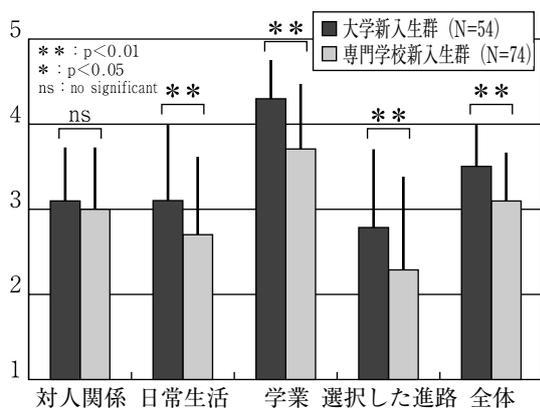
が 1.9 ± 0.9 であったのに対して、平成17年度群は 2.7 ± 1.2 と有意に増加していた ($p < 0.01$)。「対人関係」では平成15年度群が 2.8 ± 0.9 であったのに対して、平成17年度群は 3.2 ± 0.7 と有意に増加していた ($p < 0.05$)。「学業」では平成15年度群が 3.5 ± 0.9 であったのに対して、平成17年度群は 3.9 ± 0.7 と増加傾向は認められたが、有意差はなかった ($p = 0.068$)。「日常生活」では平成15年度群が 2.5 ± 1.0 であったのに対して、平成17年度群は 2.9 ± 0.8 と増加傾向は認められたが、有意差はなかった ($p = 0.050$)。



イ：平成15年度と平成17年度群の比較



ロ：1年次と2年次の比較



ハ：大学新入生群と専門学校新入生群

5 = 非常に不安である 4 = 不安である ns : no significant
 3 = どちらでもない 2 = 安心である
 1 = 非常に安心である

図1 アンケート調査結果

3.4 考察

「選択した進路」では、平成17年度群の方が平成15年度群よりも有意に増加していた。「選択した進路」に関する調査項目では特に「入学した学科が自分にあっていないような気がして不安である」という設問と「今、専攻している学科は、自分にはあっていないのではないかと不安になる」という設問で著しく増加していた。いずれの設問も専攻に関する不安であり、その原因としては前回と同様に、入学前より作業療法士をよく知らないまま進路を選択し、入学する者が少なからず存在することが考えられた。また、入学しても作業療法士のイメージがつかないまま入学時と変わらず、学生生活を漫然と過ごしている学生の存在も前回同様に示唆された。「選択した進路」に対する不安の軽減のためには、早期から自分の将来像を具体的にイメージさせる工夫と、カリキュラムを一步步消化していけば夢がかなうという自信をもたせる工夫が必要である。その取組みの一つとして、平成17年度は3年生の総合臨床実習報告会に1年生を任意に参加させる機会を設定した。1年生からすれば2年後の自分がある程度イメージできたという効果を得ている。その反面、苦勞した先輩の経験談から余計に不安を増加させた可能性も否定できない。今後も「選択した進路」

に対する不安の軽減のために種々の取組みとその成果を検証していく必要がある。

「対人関係」では、平成17年度群の方が平成15年度群よりも有意に増加していた。「対人関係」に関する調査項目では特に「教員に話しかけられると何か不安になる」という設問と「友達と一緒に何かをしなければならないとき、うまく協力できるか不安な気持ちになる」という設問で著しく増加していた。

「教員に話しかけられると何か不安になる」第一の理由としては、クラス担任制の差が挙げられる。前回の担任は当学園のOBである30歳前半の独身男性1名体制であったのに対して、今回は40歳台の男性2名体制であった。つまり、前はOBであり年齢も近い分、学生からの心理的距離も比較的近かったと言える。今回は年齢差が大きくなった分、心理的距離も遠くなってしまっているのかもしれない。第二の理由として、年齢分布や男女比などのクラス構成の差が挙げられる。前は平均年齢が20.1歳で最高年齢が29歳であったのに対して、今回は平均年齢が22.8歳で最高年齢が41歳、次いで40歳、37歳と年配の学生が多いクラス構成となっていた。この点については、作業療法白書¹⁾の結果と同様の傾向を示した。男女比は平成15年度群、平成17年度群がそれぞれ7:3、4:6であった。全国的な指標（20歳代の作業療法士で男性が27%、女性が73%¹⁾）に比べると、当専門学校の入学者は男性が多い傾向にあり、特に平成15年度群では男性の割合が多かった。つまり、平成15年度群は年齢で概ね同質の学生が集団を形成していたのに対して、平成17年度群は女性の割合が増え、社会人経験も有する年齢層の高い学生が含まれていることから、個性豊かな学生が集団を形成していたと言える。この集団の質的な違いが、教員に話しかけられると不安を感じる結果につながったと推察される。

「友達と一緒に何かをしなければならないと

き、うまく協力できるか不安な気持ちになる」という理由に関してもクラス構成の差が挙げられる。つまり、年齢の高い社会人経験者とグループワークを行う機会の多い今回のクラスでは、現役入学者が社会人経験者に対して「うまく協力できるか」、あるいは「自分の意見が未熟なために否定されないか」という自信のなさや先入観が無意識の内に不安を助長していたのではないだろうか。

「対人関係」の不安には、若者の対人交流技能の低下がその根底に存在すると考えられるが、今回の結果から交流する相手である担任体制やクラス構成も不安を助長させる原因であることが示唆される。前述のように少子化と養成校の増加のために学生の学力低下や語彙力の低下は避けられず、そのために自分の考えを人に伝えるという対人スキルの発達も不十分となっている。作業療法士を養成する専門学校では、小人数クラス編成により学力低下や語彙力低下の補強を、専任教員が率先して行うなど、学生の不安を軽減させるための方策が必要とである。

「学業」と「日常生活」に関して、前回に比較して今回の結果では有意差は得られなかったが、不安の増加傾向を認めた。さらに、アンケート調査全体でも、平成17年度群の方が平成15年度群よりも有意に増加していた。その大きな原因の一つとして、当学園の専門学校による作業療法士養成課程が今年度の新入生を最後に閉校に向かうことが挙げられる。クラス担任からは「後がない」、「3年で卒業しろ」と叱咤激励されるなか、自分のペースで進路について悩む余裕すらなく、多忙なカリキュラムを消化している現実が非常に厳しいことは容易に想像できる。学生には良い意味で緊張感を持たせながらも、作業療法士になる夢をかなえる支援が教員に求められている。

4. 同一対象者に対する同一アンケートによる縦断調査の実施

4.1 縦断調査の目的

本調査では、特に「選択した進路に対する不安（以下、進路）」に着目し、『1年次の年度末に実施された臨床見学実習を通じて、具体的な作業療法現場が見学できたので、進路に対する不安は軽減した』という仮説を立て、これを検証するために、新入生のときに実施したアンケートを同一対象者が2年に進級した直後に再度実施し、不安の縦断的变化について検討することを目的とした。

4.2 対象と方法

対象は当学園専門学校作業療法学科2年生34名（平均年齢 22.9 ± 5.9 歳）であった。今回も21項目版アンケート調査を集団調査方式にて実施した。対象者に対して、アンケート調査研究の説明を行い、全員から同意を得た。回答も同様に5件法とし、点数が多いほど不安が高い不安点数を求めた。統計処理はMann-WhitneyのU検定を実施し（Dr.SPSS II for Windows 11.01を使用）、有意水準を5%未満とした。平成17年度に実施したアンケート結果（以下、1年次）も同様に点数化し、今回のアンケート結果（以下、2年次）と比較検討した。

さらにアンケート調査を行った全ての学生における「臨床見学実習成績（以下、実習成績）」、「臨床見学実習指導者の総評（以下、総評）」、「評価に対する学生の感想（以下、感想）」から今回のアンケート調査項目に該当する記述（以下、コメント）を抜き出し、実習成績と不安の関係を定性的に分析した。実習成績のうち「優」を成績上位者群（以下、A群）、「良」または「可」を成績下位者群（以下、B群）とした。なお、主観的判断や偏見を排除するため、我々共同研究者の内3名が総評と感想のコメントからの抜

き出しを実施し、それをカテゴリーに分けて分類化した。

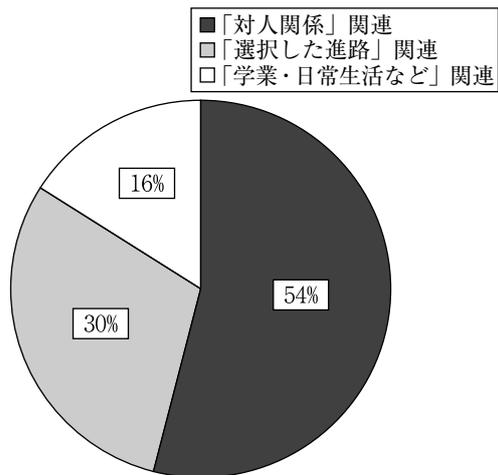
4.3 結果

アンケート調査の有効回答率は100%であった。図1-ロは21項目全体の各因子の合計点と4因子の合計点（以下、全体）を該当項目数で割り戻した結果を示している。グラフの縦軸は「3」を基準に「5」に近づくほど「不安」が強くなり、反対に「1」に近づくほど「安心」の程度が強くなることを示している。全体では1年次が 3.4 ± 0.5 であったのに対して、2年次は 3.6 ± 0.7 と有意に増加していた（ $p < 0.05$ ）。「選択した進路」では我々の予測に反して、1年次が 2.7 ± 1.2 であったのに対して、2年次は 3.4 ± 1.0 と有意に増加していた（ $p < 0.01$ ）。また「対人関係」も1年次が 3.2 ± 0.7 であったのに対して、2年次は 3.6 ± 0.6 点と有意に増加していた（ $p < 0.05$ ）。「日常生活」と「学業」では有意な増加は認めなかった。

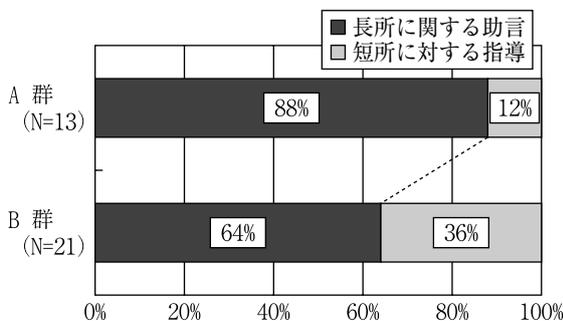
図2-イは、総評とコメントの結果をまとめたものである。抜き出したコメント121件のうち、対人関係に関するコメントが最も多く（54%）、2番目に進路（30%）が多かった。残りの学業と日常生活に関するコメントは両方で16%と少なかった。

実習成績ではA群が13名、B群が21名であり、図2-ロは実習成績別の進路に該当するコメントの割合を示した。A群のコメントでは長所が88%、短所が12%と進路に該当する助言が多かったのに対し、B群のコメントでは長所が64%、短所が36%とA群に比べて短所に関する記載が多かった。

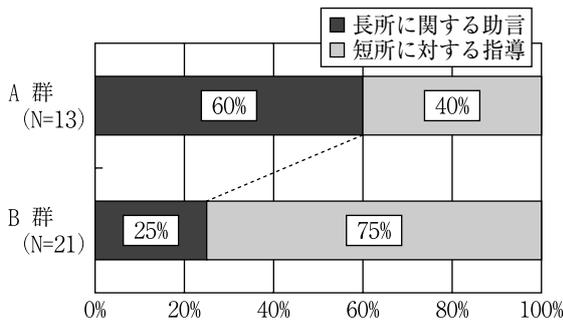
図2-ハは実習成績別の対人関係に該当するコメントの割合を示している。A群では長所に関する助言が60%であったのに対し、B群では短所に関する指導が75%と長所に関する助言を上回っていた。



イ：「実習指導者の総評」と「学生の感想」から抜粋した記載内容の内訳



ロ：「実習成績」と「選択した進路」に関する助言・指導の内訳



ハ：「実習成績」と「対人関係」に関する助言・指導の内訳

図2 「実習指導者の総評」と「学生の感想」

4.4 考察

「選択した進路」では1年次よりも2年次の方が有意に増加していた($p < 0.01$)。これは我々の『1年次の年度末に実施された臨床見学実習を通じて、具体的な作業療法現場が見学できたので、進路に対する不安は軽減する』という仮

説と正反対の結果であった。また、「対人関係」も1年次よりも2年次の方が有意に増加していた($p < 0.05$)。

作業療法士の養成課程において、1年次の臨床見学実習は、「集団あるいは個人で施設に行き、オリエンテーションや施設・作業療法部門の見学などを行う場¹⁰⁾」であり、臨床実習は実習指導者の下で医療従事者としての言動が求められる。しかも実習終了時点で「挨拶がうまくできなかった。」「緊張してしまって、対象者と良好な関係が構築できなかった。」「専門用語を適切に用いて記録やレポートをまとめられなかった。」「提出物が遅れてしまった。」などの具体的課題が実習成績として指導者から教授される。図2-ロからも明らかなように、A群はB群に比べて長所に関する助言が多いが、学生の立場からすれば実習成績が上位であっても「実習指導者の期待通り、自分が作業療法士としてやっていけるだろうか?」という予期不安を持ち、B群の学生は「指摘された短所から、自分は本当に作業療法士としてやっていけるだろうか?」という現実不安を招いたとも考えられる。

対人関係スキルはインフォームドコンセントに基づくサービスを行う上でも最も基本的かつ重要なスキルの一つでもある。コメントの中でも対人関係に関するものが54%と最も多かった。臨床実習は学内では曖昧な形でしか把握できなかった対人関係スキルの問題が顕在化する絶好の機会である。図2-ハからも明らかなように、B群の75%は、対人関係の短所に関する指導を受けている。これらの指導も、自分が本当に作業療法士としてやっていけるだろうかという現実不安を招いたと推察される。

今回の結果は「進路」や「対人関係」に関する不安が、1年次から2年次へと学年が進むにつれて減少するのではなく、増加することを示すものであった。1年次の終わりに実施される

臨床見学実習は、1年次の前期に抱いていた漠然とした抽象的不安を、作業療法士としてやっていけるだろうかという具体的不安に変化させる衝撃的な体験とも言える。作業療法士養成課程の教員は、学生が進級に伴い不安が量として増加する事実を把握するだけでなく、抽象的不安から具体的不安へとその構造が質的に変化することも念頭に、その道の先達として学生不安構造の変化を共感することも重要な仕事であることを認識しなければならないことが示唆された。

5. 大学1年生に実施した同一アンケート調査の結果

5.1 調査の目的

これまでの報告は専門学校生の有する不安について、その実態を明らかにしてきた。上述したように当河崎学園は平成18年度から4年制大学での作業療法士養成を開始した。そこで、本調査は大学新入生の有する不安が、専門学校新入生と比較して差があるのか、あるとすればどの範疇なのかについて探求することを目的に実施した。

5.2 対象と方法

対象は当河崎学園作業療法専攻の大学1年生55名(平均年齢 19.5 ± 2.9 歳 以下、大学新入生)であった。今回も21項目版アンケート調査を集団調査方式にて実施した。なお、今回は対象者に対するアンケート調査研究の説明の中で、個人を特定しないことの了解を得た上で、記名による調査とした。回答も同様に5件法とし、点数が多いほど不安が高い不安点数を求めた。統計処理はMann-WhitneyのU検定を実施し(Dr. SPSS II for Windows11.01を使用)、有意水準を5%未満とした。今回のアンケート結果(以下、大学新入生群)と平成15年度と平成17年度の専

門学校新入生に実施したアンケート結果(以下、専門学校新入生群)を比較検討した。

5.3 結果

アンケート調査の有効回答率は97%であった。図1-ハは各群における不安要因の比較結果を示している。全体では大学新入生群が 3.5 ± 0.5 であったのに対して、専門学校新入生群は 3.1 ± 0.6 と、大学新入生群の方が有意に高かった($p < 0.01$)。「選択した進路」では大学新入生群が 2.8 ± 1.0 であったのに対して、専門学校新入生群は 2.3 ± 1.1 と、大学新入生群の方が有意に高かった($p < 0.01$)。「対人関係」では大学新入生群が 3.1 ± 0.7 であったのに対して、専門学校新入生群は 3.0 ± 0.8 と、両群で有意差はなかった。「日常生活」では大学新入生群が 3.1 ± 0.9 であったのに対して、専門学校新入生群は 2.7 ± 1.0 と、大学新入生群の方が有意に高かった($p < 0.01$)。「学業」では大学新入生群が 4.3 ± 0.5 であったのに対して、専門学校新入生群は 3.7 ± 0.9 と、大学新入生群の方が有意に高かった($p < 0.01$)。

5.4 考察

今回実施したアンケート調査の結果から、不安は専門学校新入生群よりも大学新入生群の方が高い、すなわち、専門学校新入生群の方が大学新入生群よりも低いことが示された。

その理由について第一に、大学新入生群と専門学校新入生群の年齢および社会経験の差が挙げられる。当河崎学園の場合、専門学校への入学者は高校を卒業した直後、または、1~2年の浪人生活の後に入学した「現役・浪人組」と大学卒業後に資格を取得するために、または、社会で経験を積んだ後に再度一念発起して入学した「大卒・社会人組」の2層構造が毎年のように存在する。特に「大卒・社会人組」の多くは「現役・浪人組」の若手を牽引するいい意味

での兄貴分のような役割となり、「現役・浪人組」の中途半端な考えや態度を浄化するという作用が生じる。その一例として、専門学校新入生群の学生は、社会人経験学生の文章作成能力の高さや礼儀作法などで、普段の学生生活からも学ぶことが多いと感じていることをよく耳にする。一方、大学への入学者はそのほとんどが「現役・浪人組」であり、「大卒・社会人組」は少数である。そのため、「大卒・社会人組」が「現役・浪人組」を牽引するような作用は生まれず、「大卒・社会人組」は目的のために粛々と勉強に勤しむことが多いようである。

「選択した進路」で専門学校新入生群の方が不安が低かった理由の一つとして、専門学校新入生群の方が入学目的の明確な「大卒・社会人組」の占める割合が多いことが挙げられる。上述の通り「とりあえず大学に入った学生」や「就職が良さそうだから入学した学生」の場合、授業に対しては無断欠席が多くなり、難解な解剖学・生理学という基礎医学科目を真剣に理解するための動機付けを維持することは困難となる。その結果、試験で満足な結果を得られないために、作業療法士になりたいという気持ちをさらに弱めてしまう。「現役・浪人組」ではその傾向が強かったのかもしれない。確かに大学は自由である。勉強に勤しむのも、部活やアルバイトに明け暮れるのも、全く授業に出ないのも学生が自らの意思で選択した結果であるので、大学教員がとやかく言うのはそもそもお門違いなのかもしれない。

しかしながら、作業療法士という専門職を養成する大学の場合、教員は学生の行動や態度にも教育的な関わりが必要だと我々は考える。なぜなら、作業療法士の養成には臨床実習が不可欠だからである。現在の教育制度では臨床実習は実習指導者のモチベーションに支えられているといっても過言ではない。実習指導者は本業である患者への治療や日常生活動作練習の提供

の他に、長期に渡って実習生を臨床現場で指導するために、実習に関する養成機関(大学など)との調整、医局・看護部・事務局との調整、患者・家族への協力依頼などにもかなりの尽力が必要である。この実習指導者のモチベーションと尽力に報いるためには、学生の行動や態度にも大学教員が責任をもって教育しなければならないのは当然であろう。

「学業」に関して、専門学校新入生群の方が大学新入生群よりも不安が低い理由も、専門学校の方が入学目的の明確な「大卒・社会人組」の多くが兄貴分となり、「現役・浪人組」の中途半端な考えや態度を浄化するという作用が働くことが挙げられる。「大卒・社会人組」の中には学費を生み出すためのアルバイトが必要な中で、あるいは家事や育児をしながら寸暇を惜しんで勉強している姿を、「現役・浪人組」は目の当たりにする。残念ながら大学ではこの生の厳しさに触れる機会は皆無に等しい。

「日常生活」では、大学新入生群の方が専門学校新入生群よりも不安が高かった。この理由の一つに大学新入生群の方が専門学校新入生群よりもはるかに広い地域から学生が在籍していることが考えられる。大阪府貝塚市水間本州南限圏の天然記念物であるブナ林を育む「和泉葛城山」など、豊かな自然に囲まれた地であり、学生街についてはこれから形成される土地柄である。「現役・浪人組」が多い中で、親元を離れ一人暮らしをすることは開放感と伴に不安も高まることは容易に想像できる。

6. まとめ

今回、独自に作成したアンケートに基づく調査結果から当河崎学園専門学校および大学で作業療法士を目指して入学してきた学生の有する不安について実態を報告した。山田ら¹³⁾は、専門学校入学生を対象に「入学する迄の経過や

入学後の状況等についてのアンケート調査」を実施し、入学後の状況として、努力しなければと思いつつ、うまくいかないと回答する学生が多かったと報告している。さらに、学生の状況やニーズを把握するための定期的な調査の必要性を示唆している。

本報告で明らかになった学生の有する不安の中でも「選択した進路」は、在学4年間を通じて大きな課題となる。専門学校では選任教員が担任となり、作業療法士の先達として知識や技術の習得だけでなく、態度面や情意面の重要性について、ホームルームなどを利用して伝えてきた。しかし大学カリキュラムの中には、ホームルームの時間もなく、専門学校のとくのように明確な担任制もない。そこで我々作業療法専攻の教員が、特に態度面や情意面の重要性を伝える目的に、不定期ではあるがカリキュラムの空き時間を利用して「作業療法ガイダンス(以下、ガイダンス)」を試行している(図3)。ガイダンスの内容は、「挨拶」「言葉」「態度」など医療人として最も基本となる事項をテーマにした、教員によるロールプレイや学生によるグループ討議などである。学生にはこのガイダンスを通じて、作業療法士になるために求められる医療人としての心構えに気づききっかけとなることを期待している。特に友人の意見等から、再び自分を振り返ることができるので、漠然とした作業療法士のイメージを少しでも具体的にイメージできる機会となることを目標としている。今後その効果についても客観的に検証していかなければならない。

地域に貢献できる人材の育成が我々専門職大学教員の使命であることを肝に銘じ、我々が歩んできた作業療法士の道を、後輩である学生が胸を張って生き生きと歩いていけるようにするため、今後も継続して学生が持つ不安を明確に把握し、有効な対策を一つずつ講じて、その効果を検証していきたいと考えている。本報告が



グループ討議



学生による発表

図3 「OTガイダンス」風景

その一助になることを願って止まない。

[文献]

- 1) 日本作業療法士協会. 作業療法白書2005. 作業療法2006, 25(suppl).
- 2) 文部科学省 専門学校の高度化の現状と今後の課題 <http://www.ment.go.jp/b.menu/shingi/chukyo4/gijiroku/003/04072001/008.htm> (access 2006/11/9).
- 3) 落合恵子, 本多陽子, 落合良行, 藤井恭子他医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連. 医学教育2006, 37: 141-149.
- 4) 岸上雅彦, 津田勇人, 勝山隆, 森ひろし他 医療専門学校における作業療学科1学年の不安要因について. リハビリテーション教育研究

- 2005, 10 : 15-17.
- 5) 岸上雅彦, 津田勇人, 勝山隆, 森ひろし他 医療専門学校における作業療法学科1学年の不安要因について(第2報). リハビリテーション教育研究2006, 11 : 68-70.
 - 6) 藤井義久 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究1998, 68 : 441-448.
 - 7) 福田敏幸 理学療法学科学生における臨床実習前の不安要因の分析. リハビリテーション教育研究1999, 5 : 27-29.
 - 8) 毛束忠由 作業療法学科新入生のCMIおよびSTAIによる不安特性とその後の経過について. 作業療法2003, 22(Supple) : 458.
 - 9) 中村紀子 学生にとって理解しやすい授業をするには. 作業療法2004, 23(Supple) : 591.
 - 10) 作田浩行・鈴木久義・古田常人・奥原孝幸 専門職を選択する過程における情報収集手段について —作業療法学科に入学した学生の場合—. 作業療法2004, 23(Supple): 649.
 - 11) 谷岡三千代 作業療法学科に入学した学生における将来の志向性に関する調査の一考察. 作業療法2003, 22(Supple) : 473.
 - 12) 市川和子編 “標準作業療法学 臨床実習とケーススタディ” 医学書院, 東京, 2005.
 - 13) 山田弘幸, 笠井新一郎, 石川裕治, 長嶋比奈美他 言語聴覚療法・理学療法・作業療法専攻1年生の入学経過等について. 高知リハビリテーション学院紀要 2000, 1巻 : 91-97.